

佛教學研究 第七十三号 抜刷  
平成二十九年三月十日 発行

『浄土法門源流章』 所説の長西教義考

——「浄土疑芥」との比較を通して——

佐  
竹  
真  
城

# 『浄土法門源流章』所説の長西教義考

——「浄土疑芥」との比較を通して——

佐 竹 真 城

## 問題の所在

東大寺の学僧凝然（一二四〇—一三二二）が、晩年にあたる一三一一年に撰述した『浄土法門源流章』（以下『源流章』と略称）は、鎌倉期までの浄土教の流伝状況や諸師の教学を概説した一書である。なかでも、法然（一一三三—一二二二）の門流について、概説書としては比較的詳細に触れられている。凝然はそれら法然門下諸師の没後まもない時期、あるいは同時期に活躍した人物であることに加えて、学僧としての評価の高さから、その記述はかなり信用のおけるものと考えられている。殊に、著作が散逸して今日に伝わらない人師を研究する上では、『源流章』の記述を文証として明らかにされるものが少なくなかった。小論で扱う覚明房長西（一一八四—一二六六）もその一人であり、その教学は古来『源流章』の所伝に多く依拠しながら論じられてきた。長西に関する『源流章』の記述について住田智見氏は、

長西は章主親承の師なれば、今処に示さるゝ所は尤も信用すべきなり。

（『浄土源流章』三二六三頁）

と述べて、「親承」を根拠にもっとも信用に足るものであるとしている。<sup>①</sup>「親承」とは、すなわち凝然の『維摩経菴羅記』に、

昔北洛九品寺長西上人。浄土法門之先徳也。予、齡居三十二、往詣彼寺、聽講、善導和尚觀經義疏。于時長西大徳年齡七十八。即弘長元年辛酉七月、自恣竟也。西公語予云、觀經三心維摩經十七事中初之三心起信論中所説三心、二經一論所説全同。維摩觀經並是浄土門中心行、起信三心穢土修行、聖道門中習業安心。所<sub>レ</sub>向雖<sub>レ</sub>異、法体是同。へ云云。  
(『仏全』卷五・二二六頁上)

と、凝然みずから長西による『觀經疏』の講説の座に連なり教えを承けたと記していることを表している。換言すれば、師弟の關係であるということになり、弟子が師の教義を纏めたものであるから信憑性が高いということである。しかしながら、この考え方については異論もある。たとえば『源流章』において、

住心、良遍、真空等師皆立<sub>ニ</sub>諸行本願義<sub>一</sub>。与<sub>ニ</sub>長西所立<sub>一</sub>同契云。  
(『大正藏』卷八四・二〇一頁中)

と、住心(一一二四五)・良遍(一一九五―一二五二)・真空(一二〇四―一二六八)らが主張する「諸行本願義」と、長西所立の教義とが同一にして符合するものであると伝えているが、前田聰瑞氏は、

〔長西所立の教義とが同一にして符合するものであるとする〕この所論には、点頭し難き節もあるが：

(『国訳一切經』史伝部二十四所収解題三二〇頁 ※〔一〕内は筆者による加筆)

と、理由こそ定かではないが、一概に首肯し難いことを述べている。事実、同時代に活躍した西山派の行觀(二四一―二三二五)が著した『選択集秘抄』には、

云<sub>ニ</sub>念仏外諸行往生諸行本願<sub>一</sub>人、詰<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>置<sub>一</sub>也。付<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>木幡慧信房<sub>一</sub>人、亘<sub>ニ</sub>八宗<sub>一</sub>学匠。此人不用<sub>ニ</sub>選択<sub>一</sub>、難<sub>ニ</sub>云<sub>一</sub>

欲<sub>レ</sub>勸<sub>ニ</sub>念仏<sub>一</sub>、只<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>念仏<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>本願<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>云<sub>一</sub>。又<sub>ニ</sub>下<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>余<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>本願<sub>一</sub>者、僻事<sub>ニ</sub>難<sub>一</sub>也。此人云、九品寺覚

明房云<sub>ニ</sub>諸行本願<sub>一</sub>、誠<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然<sub>一</sub>。行<sub>ニ</sub>云<sub>一</sub>、合<sub>ニ</sub>法門<sub>一</sub>、言<sub>ニ</sub>至<sub>レ</sub>程<sub>一</sub>折節、談<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>選択<sub>ニ</sub>時<sub>一</sub>、見<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>云<sub>一</sub>、覚明房聞<sub>ニ</sub>学匠<sub>一</sub>

有<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>選択<sub>ニ</sub>事<sub>一</sub>、言<sub>ニ</sub>即<sub>レ</sub>歸<sub>一</sub>、覚明房云、只<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>賜<sub>一</sub>、是<sub>ニ</sub>会<sub>レ</sub>釈<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>云、雖<sub>ニ</sub>会<sub>レ</sub>釈<sub>一</sub>、何事<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>一</sub>、歸<sub>レ</sub>了。誠<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>諸

行本願立<sub>レ</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>文。  
(『浄全』卷八・三六七頁上)

とあり、「諸行本願」について真空と長西の理解に異なる点の存したことを伝えている。このことから、『源流章』の記述が長西のすべてを誤りなく伝えているのかは聊か疑問が残る。これらの点も相まって、すでに吉田淳雄氏が指摘しているように、『源流章』の記述が凝然個人の価値観、あるいは理解が反映されたものである可能性を考慮せずに扱うことは問題であろう。

そもそも、長西の撰述であることが確実視できる書は長らく散逸し、その思想の細部までを窺い知ることが叶わなかった。それはすなわち、『源流章』の記述の是非を立証する手段も失われていたことを意味するが、今日では金沢文庫より長西撰述書の古写本が顕出され、検証することが可能となっている。その古写本こそ、「浄土疑芥」である<sup>④</sup>。しかし、近年では「浄土疑芥」の一部が研究に使用されるようになったものの、凝然の所伝をほぼ並列に扱って論じられ、管見の限り「浄土疑芥」の所説と、『源流章』の所伝とを照合した研究は確認できない。そこで、筆者が検討を加えたところ、「浄土疑芥」と『源流章』との説示は必ずしも符合するものではないことがわかってきたのである。

上述の点より小論は、『源流章』所伝の長西教義について、「浄土疑芥」との比較を通して、その正否を明らかにするとともに、長西自身がどのような理解であったのかを論じることを目的とする。

### 『源流章』所説の長西教義

まず、『源流章』における長西に関する記述を確認しておきたい。

郊北九品寺長西上人、房号覚明。久事<sup>ニ</sup>源空<sup>ニ</sup>練<sup>ニ</sup>浄土教<sup>ヲ</sup>。長西十九<sup>ニ</sup>出家<sup>シテ</sup>、即附<sup>キ</sup>源空<sup>ニ</sup>。源空其時年満<sup>ニ</sup>七十<sup>ニ</sup>。長西常随<sup>ニ</sup>給仕<sup>スルコト</sup>、不<sup>レ</sup>懈<sup>ラ</sup>。空公八十<sup>ニ</sup>入滅<sup>セリ</sup>、于時長西年二十九<sup>ニ</sup>、首尾十一年随逐<sup>シテ</sup>学<sup>レ</sup>法<sup>ヲ</sup>。

長西門人英哲甚多。謂澄空へ房号如輪<sup>⑤</sup>上人、理円上人、覺心大徳、阿弥陀房、空寂上人、十地上人、道  
教上人、上行大徳、証忍大徳。如<sup>キ</sup>是諸輩各随<sup>レ</sup>所承<sup>ル</sup>弘<sup>ス</sup>通淨教。澄空、理円両上人者宗<sup>ニ</sup>研天台、説法流美、  
兼随<sup>テ</sup>長西<sup>ニ</sup>習<sup>ス</sup>淨教。法蔵比丘五劫思惟、唯思修行兩哲諍論。西公作<sup>レ</sup>章。名<sup>ケ</sup>五劫思惟諍論鈔、決<sup>ス</sup>判<sup>ス</sup>兩英  
諍論。決<sup>シ</sup>判<sup>ス</sup>云、五劫修行<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>唯思念<sup>ノ</sup>。淨影等師如<sup>レ</sup>是判<sup>ス</sup>。故<sup>ニ</sup>覺心大徳讚州西三谷盛弘<sup>ニ</sup>淨教<sup>ニ</sup>。彼<sup>ノ</sup>處<sup>ハ</sup>是長  
西上人建興之寺也。

長西乃讚州人。九歳上洛随<sup>ニ</sup>管家長者<sup>ニ</sup>服<sup>シ</sup>膺俗典<sup>ヲ</sup>。出家入<sup>レ</sup>緇。源空寂後遊學<sup>ス</sup>。非<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>學<sup>ニ</sup>研天台<sup>ニ</sup>。伝<sup>ニ</sup>  
三觀法<sup>ヲ</sup>。随<sup>ニ</sup>住心大徳<sup>ニ</sup>。學<sup>ニ</sup>止觀等<sup>ヲ</sup>。謁<sup>シ</sup>俊苾法師<sup>ニ</sup>。亦習<sup>シ</sup>止觀。值<sup>ニ</sup>仏法禪師<sup>ニ</sup>。久<sup>シ</sup>經<sup>テ</sup>禪學<sup>ヲ</sup>。起信、釈論無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
諳練。淨土法門温習<sup>ス</sup>。極<sup>ナリ</sup>大<sup>ナリ</sup>。尋<sup>テ</sup>古知<sup>レ</sup>今<sup>ヲ</sup>。達<sup>シ</sup>此通<sup>ス</sup>彼<sup>ニ</sup>。窮<sup>メ</sup>幽<sup>ヲ</sup>。理<sup>ヲ</sup>。陶貫洞朗<sup>ス</sup>。無<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>遺<sup>ス</sup>。  
所立義云、念仏諸行<sup>ハ</sup>皆是<sup>ニ</sup>弥陀如来本願<sup>ニ</sup>。随<sup>ニ</sup>所修業<sup>ニ</sup>。皆生<sup>ニ</sup>報土<sup>ニ</sup>。一切穢土<sup>ハ</sup>。修業<sup>ノ</sup>之人有<sup>ニ</sup>九品別機<sup>ニ</sup>。宜<sup>シ</sup>異<sup>ス</sup>  
故。九品行者俱生<sup>ニ</sup>報土<sup>ニ</sup>。随<sup>ニ</sup>機任<sup>ニ</sup>業有<sup>ニ</sup>來迎別<sup>ニ</sup>。生已<sup>ハ</sup>即是<sup>ニ</sup>齊同<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>退<sup>ス</sup>。通<sup>ニ</sup>是極樂華藏世界海会大衆<sup>ニ</sup>。直<sup>ニ</sup>  
受<sup>ニ</sup>法樂<sup>ニ</sup>。普<sup>ク</sup>至<sup>ニ</sup>十方<sup>ニ</sup>。於<sup>ニ</sup>諸仏所<sup>ニ</sup>。歷事供養<sup>シ</sup>。現前蒙<sup>レ</sup>記<sup>ヲ</sup>。頓歷<sup>ニ</sup>十地<sup>ヲ</sup>。忽<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>補處<sup>ニ</sup>。或<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>十方<sup>ニ</sup>。速<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>正覺<sup>ヲ</sup>。或<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>  
大悲<sup>ヲ</sup>起<sup>シ</sup>闡提願<sup>ヲ</sup>。自証化他、応化齊拔<sup>シ</sup>。尽<sup>ニ</sup>未來際<sup>ヲ</sup>。業用無<sup>ナリ</sup>方。第十八願念仏往生、第十九願聖衆來迎、第二  
十願諸行往生。第十八中有<sup>ニ</sup>三業念<sup>ニ</sup>。前<sup>ニ</sup>三觀<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>親行觀<sup>ニ</sup>。修<sup>シ</sup>習<sup>シ</sup>定善<sup>ヲ</sup>。思惟方便、正受親成。三輩散善。臨終  
見<sup>ス</sup>。眼<sup>ヲ</sup>。証<sup>シ</sup>境<sup>ヲ</sup>。是<sup>ニ</sup>親闡觀<sup>ニ</sup>。親<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>仏<sup>ニ</sup>。定<sup>ニ</sup>散門<sup>ニ</sup>異<sup>ニ</sup>。得<sup>レ</sup>定<sup>ニ</sup>証<sup>ニ</sup>境<sup>ニ</sup>。三昧是同<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>親念仏<sup>ニ</sup>。兩<sup>ニ</sup>三昧<sup>ニ</sup>。為<sup>レ</sup>宗<sup>ト</sup>。  
或<sup>ハ</sup>約<sup>テ</sup>章提請<sup>ニ</sup>定善<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>宗<sup>ト</sup>。約<sup>テ</sup>三自開<sup>ニ</sup>散善<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>宗<sup>ト</sup>。由<sup>テ</sup>定善<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>親念仏<sup>ニ</sup>。為<sup>レ</sup>宗<sup>ト</sup>。由<sup>テ</sup>散善<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>念仏<sup>ニ</sup>。為<sup>レ</sup>宗<sup>ト</sup>。二門互<sup>ニ</sup>取<sup>リ</sup>  
互<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>宗<sup>ト</sup>。如<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>等義<sup>ニ</sup>。即<sup>チ</sup>彼<sup>ノ</sup>所立<sup>ナリ</sup>。

(『大正藏』卷八四・二〇〇頁中一)

【試訳】

京都の郊外北部の九品寺に住した覚明房長西上人のこと。しばらく源空に師事して浄土教を錬磨した。長西は十九才の  
時に出家して、七十才になる源空の門下に入った。長西は源空に常随して身の周りの世話を怠らなかつた。源空は八十才

で入滅し、その時に長西は二十九才であつたから、首尾十一年にわたつて源空に付き随つて教えを学んだこととなる。

長西の門人には、聡明な者がとても多かつた。たとえば、如輪房澄空、理円、覚心、阿弥陀房、空寂、十地、道教、上行、証忍が挙げられる。これらの人師は、それぞれが長西から相承した教えに随ひ、浄土教を弘通していった。澄空、理円の両者は、もと天台の教えを研鑽しており、説法も流美であつた。そこに兼ねて長西に随つて浄土教を習学したのである。「ある時、」この二人の間に、「法蔵菩薩の五劫思惟はただの思惟であるのか、修行であつたのか」ということで評論が起こる。「その時に」①長西は『五劫思惟諍論鈔』と名付けた一書を著し、両者の諍論を決判したのである。その決判は、「五劫は修行であり、ただ思惟しただけではない。淨影等の師も同様に判じていることによる」というものであつた。覚心は讃岐の西三谷において盛んに浄土教を弘めた。西三谷の寺院も長西が建興した寺院である。

長西は讃岐の人である。九歳の時に上洛して菅原家の長者に随つて俗典を服膺し、「その後」出家して僧となつた。源空の示寂後は、諸処に遊学した。天台を研鑽して三觀の法を伝え、住心からは止觀等を学び、さらに俊仍からも止觀を習学し、道元からは禪を修習して、『起信論』、『大智度論』など鍊磨して熟達しないものはなかつた。「なかでも」浄土の法門を習熟すること極めて廣大であつた。古を尋ねて今を知り、あらゆるものに通達し、幽玄を窮めて理を尽くし、隅々まで精通していた。

長西所立の義は、②「念仏と諸行とはすべて阿弥陀如来の本願であり、修する業にしたがつて、すべての者が報土に往生できる。③穢土で修業するすべての人に機根の異なりから九品の差別がある。「しかし、」九品の行者はすべて報土に往生する。機根や修する業によつて来迎の有無という差異があるものの、④往生後はすべての者が等しく不退の位となる。極楽華藏世界海会の大衆に通じて、直ちに法樂を受けて、あまねく十方の諸仏の御所へ至り、それらの諸仏に任せて供養し、目の当たりに記別を蒙り、すぐさま十地の階位を歴てたちまちに補処の位に至るのである。あるいは十方諸仏のもとで速やかに正覚を成り、あるいは〔穢土にあつて〕大悲によつて闡提の願を発し、自ら証して他を教化し、応化してひと

しく苦を抜き、そのはたらきは場所を選ぶことなく恒久的である。⑤〔長西は、〕第十八願は念仏往生、第十九願は聖衆来迎、第二十願は諸行往生と定義した。そして、⑥その第十八願のなかに三業の念仏があるという。『観経』の前三観は観行の観であり、定善を修習して思惟・方便し、正受・観成するものである。〔後半の〕三輩観は散善である。臨終に見仏し、〔智慧の〕眼が開けて〔さとりの〕境界を証得するもので、これは観矚の観である。⑦観仏と念仏とは定善門・散善門の異りであり、〔両門とも〕禪定に入って〔さとりの〕境界を証得する。どちらも三昧は同じであるから、観仏三昧と念仏三昧との両様を宗旨とするのである。あるいは韋提希の請いの観点から定善を宗旨とし、仏の自開という観点から散善を宗旨とする。定善によるから観仏を宗旨とし、散善によるから念仏を宗旨とする。定散・観念の二門を互いに取り、互いに一宗を成立させているのである。以上に述べてきた義が、長西の立てた教義である。

以上、『源流章』所説の長西教義は、文段にしたがい意を取って大別すれば、①法蔵菩薩の五劫思惟に対する理解、②念仏・諸行の本願・非本願、③所入の仏土と来迎の有無、④往生後の位、⑤いわゆる生因三願の理解、⑥三業の念仏思想、⑦定散・観称一宗互成という、七項目に分類することができる。以下、これらの分類に沿って「浄土疑芥」の思想と照合してみたい。

### 『源流章』所説の長西教義考

#### ①法蔵菩薩の五劫思惟に対する理解

『源流章』のはじめの一段には、長西の門弟であった澄空と理円の間に、法蔵菩薩の五劫思惟は、ただ思念しただけであったのか、修行であったのかをテーマに諍論のあったことが記されている。そして、この問題につい

て長西は、『五劫思惟諍論鈔』なる一書を制作し、浄影寺慧遠等の諸師を踏襲して、ただ思念しただけではなく、修行であつたことを決判したという。上記の如き「法蔵菩薩の五劫思惟」への言及は、『序分義光明抄』に確認できる。すなわち、

疑云、因与レ行果与レ報、有レ何別ニ歟。答、因者法蔵比丘四十八願也。行者四十八願因上、即五劫修行別行也。

(『宗学研究』卷二一・一八七頁、※卷一〇・八丁左―九丁右)

とあるもので、ここでは因と行、果と報の異なりを問うなかで、行を四十八願の上に為された五劫の修行の別行であると述べている。

現状、管見の限りでは、「浄土疑芥」において法蔵菩薩の五劫思惟を論じた箇所はこの一文しか確認できていないが、この点に関しては『源流章』の記述は正しく伝えたものと見ることができよう。

②念仏・諸行の本願・非本願

『源流章』の次の一段には、長西教義において念仏と諸行は何れも弥陀の本願であり、所修の業にしたがつてすべての者が往生できると理解していたことを伝えている。この点について、『法事讃疑芥』には、

又雑善者何等歟。答、念仏外諸行也。此即正雜二行中雜行也。

(金沢文庫蔵文永五年書写本、卷三・二四丁左)

と、雑善とは念仏以外の諸行であり、正雜二行でいえば雑行であると定義し、そして『散善義光明抄』には、

尋云、又雑毒等者、念仏外余行也。而雑毒善即雜行也。云々。此義如何。答、此義大以儻見歟。其故、万行皆為ニ成仏因、為ニ往生因、之条、經論章疏其明文分明也。仏満足大悲人也。何説レ毒与ニ衆生ニ哉。

(『宗学研究』卷一四・一五九頁、※卷一〇・六丁左)



とあり、雑毒を念仏以外の行、すなわち雑行と定義する見解について僻見であるとし、雑毒と雑行と区別した上で、雑行を含む一切の行はすべて往生・成仏の因となることは、経論章疏に明らかであると述べている。また、同じく『散善義光明抄』には、

又觀察等諸行豈不順本願歟。答。觀察等四可順第十八願。乃至十念中有五念門。其中称名本意。故別舉之也。諸行一向可順廿願也。第十八願巨念仏諸行故可通也。來迎願故。

（『宗学研究』卷一四・一八〇頁、※卷一／二・一五丁左）

とあり、諸行は本願に順じることではないのかと問いを立て、諸行はもっぱら二十願に順じ、第十八願は念仏と諸行との両方に通じる旨を示して、諸行往生も弥陀の本願に起因することを明らかにしている。

如上、諸行は弥陀四十八願中の第二十願に乗じることを主張し、道理的面より諸行を往生・成仏の因として容認する姿勢をとっていることが確認できる。したがって、『源流章』所伝の、所修の業に従い往生することができるといふ諸行本願の義については、相違しないものと言える。

しかしながら『法事讃疑芥』には、

疑云、不<sub>レ</sub>論<sub>ニ</sub>念<sub>ト</sub>仏<sub>ト</sub>諸<sub>ト</sub>行<sub>ト</sub>ミタ光明撰<sub>ニ</sub>往生人<sub>一</sub>歟。答。撰<sub>取</sub>必<sub>可</sub>限<sub>ニ</sub>念<sub>ト</sub>仏<sub>一</sub>也。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、卷一・三丁左）

とあり、阿弥陀仏の光明は念仏と諸行とを分け隔てなく往生人を撰するののかという問いに対し、撰取は必ず念仏に限ると答えている。また、同じく『法事讃疑芥』には、

又雑善何難<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>歟。答。疎遠<sub>ニ</sub>故也。疎遠<sub>ニ</sub>故力弱也。故般舟讚云、万行俱廻<sub>レ</sub>皆得<sub>レ</sub>往<sub>ニ</sub>念<sub>ト</sub>仏<sub>一</sub>一行最<sub>モ</sub>為<sub>レ</sub>尊。廻生雑善恐<sub>ク</sub>力弱<sub>シ</sub>、无<sub>レ</sub>過<sub>ニ</sub>一日七日念<sub>ニ</sub>へ文<sub>一</sub>。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、卷三・二四丁左）

とあり、念仏以外の諸行である雑善（雑行）は疎遠であり力が弱いから往生し難いことを、『般舟讚』を文証と

して述べている。そして『礼讚光明抄』には、

尋云、釈スルニ三心当体之<sup>ニ</sup>処既云<sup>ニ</sup>自造罪退失<sup>ト</sup>。今云<sup>ニ</sup>心不退<sup>ト</sup>相違如何<sup>シ</sup>。答<sup>フ</sup>付<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>三解<sup>ト</sup>。一<sup>ニ</sup>凡夫光触異<sup>ト</sup>、  
謂<sup>ハク</sup>約<sup>シテ</sup>凡夫過<sup>ニ</sup>造罪退失<sup>ト</sup>、凡夫退位<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。約<sup>シテ</sup>光触德<sup>ニ</sup>心不退<sup>ト</sup>、<sup>ナルカニ</sup>仏力冥加<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。二<sup>ニ</sup>一定善散善異<sup>ト</sup>、  
謂<sup>ハク</sup>約<sup>シテ</sup>定心德<sup>ニ</sup>心不退<sup>ト</sup>、悟<sup>ニ</sup>無生<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。約<sup>シテ</sup>散心者<sup>ニ</sup>造罪退失<sup>ト</sup>、未<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>無生<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。三<sup>ニ</sup>諸行念仏異<sup>ト</sup>、  
謂<sup>ハク</sup>約<sup>シテ</sup>上六品<sup>ト</sup>。余行<sup>ニ</sup>造罪失<sup>ト</sup>、余行無<sup>ニ</sup>撰取不捨益<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。約<sup>シテ</sup>念仏<sup>ニ</sup>心不退<sup>ト</sup>、觀稱共有<sup>ニ</sup>撰取不捨益<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。

(金沢文庫藏文永五年書写本、卷三・二四丁左)<sup>⑥</sup>

と説かれており、三心の当体を解釈するにあたり「自造罪退失」と述べているが、「心不退」との相違は如何なるものかという問いに対し、三解を挙げてゐる。このなか、殊に第三の諸行念仏の異なりにおいては、余行には撰取不捨の益はないが念仏には撰取不捨の益があることを示し、諸行と念仏の関係において明確に優劣のあることを明かしている。さらに『散善義光明抄』には、

但至<sup>シ</sup>定散<sup>ト</sup>者弘願外要門也<sup>ト</sup>称名正弘願法体也等之難<sup>ニ</sup>者、此又不<sup>レ</sup>爾<sup>ト</sup>歟。披<sup>ス</sup>閱<sup>ス</sup>解<sup>ス</sup>釈<sup>ス</sup>次第<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>総別意<sup>ト</sup>歟。  
先<sup>ニ</sup>釈<sup>ス</sup>彌陀本誓願極樂之要門定散等廻向等、此本誓願者往生強縁也、定散者去行也、此即<sup>チ</sup>総也。次<sup>ニ</sup>釈<sup>ス</sup>一向<sup>ニ</sup>專念等<sup>ト</sup>者、於<sup>テ</sup>定散去行中<sup>ニ</sup>諸行傍也、因明也。念仏者正也、直<sup>ニ</sup>也。於<sup>テ</sup>此中<sup>ニ</sup>觀念等助業也、称名定業也。  
故<sup>ニ</sup>別<sup>ト</sup>以<sup>テ</sup>正定業<sup>ニ</sup>一向專念等<sup>ト</sup>也。比<sup>即</sup>与<sup>ニ</sup>奪意<sup>ト</sup>也。如<sup>レ</sup>此等与<sup>ニ</sup>奪傍正意<sup>ト</sup>、世間出世間常習也。

(『宗学研究』卷一六・一二九頁、※卷三／四・一二丁左)

とある。すなわち定散の去行のなか、諸行は傍因であり因明(ついでに明かされた法)、念仏は正因であり直弁(往生の要行として直ちに説かれた法)であると述べているのである。

上述の如く、諸行と念仏は撰取の益の有無や往生の難易、傍正や因明直弁対等で差別していることが確認できる。したがって、諸行本願の義を立てながらも、あくまで念仏を中心据えていることまで言及していない『源